

1. 平成27年第5回更新審査について

6月25日、26日の2日間にわたり2000年に認証取得してから5回目の更新審査を受審しました。毎年、受審する定期審査は一年間の活動についての審査がされますが、更新審査は3年毎に過去3年の活動推移が審査対象となり、継続的な改善がなされているかなどが主眼となります。今回は審査員3名が来社され、環境マネジメントシステム適用規格の要求事項に適合して運用されているか、環境マネジメントシステムの適用範囲が適切か、目的・目標の達成状況、有効に機能しているかなど、管理責任者、事務所内各部署、第一工場、阿久和工場に対し文書、記録の詳細なチェック、現場ヒアリング及び確認などが行われました。その結果、観察事項4件の指摘はありましたが、技術力(特許取得)、各賞の受賞、神奈川県優良工場の認定などの事業活動を通じて大きな社会貢献を果たしており、また3年間を通じて環境マネジメントシステムは適切に実施されており有効な運用が行われているとの評価を得ました。事務所、現場で対応された方をはじめ、皆様、お疲れ様でした。審査へのご協力に感謝申し上げますとともに、今後も継続して環境マネジメントシステムの適切な維持管理、環境配慮の取組みにご協力いただけますようお願いいたします。



2. 気候変動と大災害

今年も「50年に一度」とか「これまでに経験したことがない」、「観測史上1位」といった異常気象による甚大な災害が各地で発生しました。7月に鹿児島県奄美地方の十島村で24時間雨量が400ミリ、8月には長崎県五島市で1時間に110ミリの「50年に1度」の猛烈な大雨が降り、9月の台風21号では沖縄県と那国町で最大瞬間風速81.1m/s(292km/h)を観測、また8月中旬まで例年になく厳しい暑さが続き、全国928観測地点のうち60か所以上で過去最高気温の記録を更新しました。下旬に入ってからは一転、オホーツク海高気圧から冷湿な空気が流れ込んだ影響で東北太平洋側では旬間日照時間が平年比2割で少ない記録1位タイとなり、9月に入ると台風17号、18号の影響により栃木・茨城をはじめ福島・会津など関東、東北で「これまでに経験したことがない」集中豪雨となり鬼怒川など河川の氾濫、土砂災害による甚大な被害をもたらしました。気象庁は、顕著な災害が発生した自然現象について「命名」を行っており、この豪雨を「平成27年9月関東・東北豪雨」と命名しました。気象庁が命名した気象現象は昭和29年の洞爺丸台風が最初で、命名することにより、過去に発生した大規模な災害における経験や教訓を後世に伝えることや、防災関係機関等が災害発生後の応急・復旧活動を円滑に実施することを期待しています。以来、命名は今回が

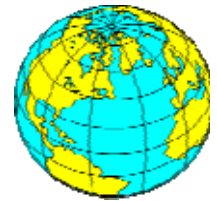
27件目ですが昭和29年から平成15年まで49年間で18件、平成16年に2件、平成18年に2件、平成20年から今回までほぼ毎年発生して6件と最近の10年間で10件となっています。統計上からも異常気象が右肩上がりが増えていきます。先日放送されたNHKスペシャル番組「巨大災害」第1集「極端化する気象～海と大気の大変動～」を見られた方もいらっしゃるかと思いますが、私もこの番組を見て異常気象についての新しい発見や考えさせられることがたくさんありました。番組では統計開始以来の高温や記録的な降水量など、気象の変化が“極端”になり始めていて、その原因は地球に仕組まれた「振り子」のような大気や海の変動がいくつも重なったためであることが明らかになってきたとしていました。変動に大きく関わっているのがマッデン・ジュリアン振動(MJO)とよばれているもので、熱帯赤道域上空で対流活動が活発な領域(大気循環場)が発生し、約1~2か月かけて東に進んでいく現象で、大気振動のひとつとされています。その周期は30-60日程度で、「振動」のように繰り返し発生しモンスーンや数年ごとに発生し海面水温がたかく高くなるエルニーニョ・逆に低くなるラニーニャの発生、移動に大きく関与しているそうです。この海と大気の変動に温暖化が重なり合うことで巨大スーパー台風が発生しやすくなることが分かってきました。



また温暖化により北極海の氷が過去30年で最も少ない状況となり、近年の極端な寒暖の差が激しい

気象の原因となっていることも分かってきました。北極の周りを極夜ジェット気流とよばれる高速の偏西風が回転しています。この回転している内側には強い寒気が閉じ込められていますが、北極の氷が解けることにより気流に変化が生じ偏西風の回転速度が遅くなって蛇行を始め、寒気が流れ出して南下し、今年は北半球のアメリカ東海岸、滅多に雪の降らないスペインをはじめとする南ヨーロッパ、中東に大寒波をもたらしました。また、この蛇行の影響でシベリア寒気団が北極に引き寄せられて強い寒気によって発達し、それが日本に流れ込んできて大寒波襲来となるのだそうです。

今、世界中の科学者が異常気象に関する膨大なデータを集め、分析して近未来の気候変動の予測を試みようとしています。たとえば赤道付近のサンゴの年輪に過去数千年の気候変動の情報が蓄積されていて、数百年に一度、極端な気象現象が現れることが判明、これに温暖化が重なると私たちが想像出来ないほどの巨大災害が起こりうるかと結んでいました。これらの成果が実を結び予測の精度がもっと上がることを期待し災害に対する備えも日ごろから心がけておきたいものです。



3. 災害伝言ダイヤルと災害用伝言板を体験してみましょう

9月1日、防災の日の朝礼でお伝えしましたが、統計上では、大地震がいつ起きてもおかしくないといわれています。これは過去の大地震が起こった年の間隔から推測されているものですが、先日の新聞に海上保安庁が南海トラフの海底に機器を設置し観測している地殻変動についての記事が掲載されていました。それによると場所によって異なりますが平均1年で5センチメートル前後移動しているそうです。歪みが限界に近づいているのでしょうか。大地震はいつか必ず起きる、いつ歪みが弾けてもおかしくない、今日、明日かもしれないという心構えと少しでも災害を減らす減災への取り組みなど日頃の備えを怠りなくしておきましょう。

東日本大震災が発生したとき、電話が殆んど通じなかったことを記憶されていることと思います。家族で被災時の連絡方法を決めておくことが大切です。よく知られているのは携帯、スマホによる伝言ダイヤル、災害用伝言板ですが、いざその時になって使い方が分からないということが無いようにしておきましょう。これらは体験利用ができます。ぜひ一度は試しておいて下さい。

【体験利用日】 毎月1日、15日 正月三が日（1月1日～1月3日）

防災週間（8月30日～9月5日） 防災とボランティア週間（1月15日～1月21日）

■災害用伝言ダイヤル(171)

音声ガイドに従って電話番号、伝言メッセージを登録または確認

■災害用伝言板（携帯、スマホで文字による連絡）

機種によって若干操作が異なりますので事前に確認しておく必要があります。

●携帯

「iMenu」の「災害用安否確認」を選択しメニューに従って伝言の登録、確認

●スマホ(主な機種の場合)

★「ドコモマーケット」から「災害用伝言板」を選択しメニューに従って伝言の登録、確認

事前に送信したい相手のメールアドレス(登録お知らせメール)を設定しておくことと良い

★「au 災害対策」で検索⇒「au 災害対策」アプリを起動かダウンロード⇒「災害用伝言板」

または以下の URL にアクセス。 <http://dengon.ezweb.ne.jp/>

安否情報の登録を行うには、あらかじめ、メールアドレス(～ezweb.ne.jp) の取得が必要です。

災害関連サービスをまとめて操作できる災害対策アプリ「災害対策」アプリが用意されているものもあります。スマートフォンおよび 4G LTE ケータイ向けに、「災害用伝言板」

「緊急速報メール」、「災害用音声お届けサービス」、「災害情報」といった大規模災害発生時に迅速な避難や安否確認を支援するサービスを、ひとつのアプリにまとめたもので、いざという時に役立つアプリです。

